

## 光はどこから？ -西光万吉の政治思想-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文学部心理社会学科 公開日: 2022-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 志野, 好伸 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/22594">http://hdl.handle.net/10291/22594</a>

〔原 著〕

## 光はどこから？ —西光万吉の政治思想—

志野 好伸<sup>1</sup>

### 要 約

水平社運動の指導者の一人である西光万吉は、マルクス主義とともに、親鸞の思想やキリスト教からも養分を得て、運動のための理論を展開した。西光は自身の主張を、彼岸にて人々が救済される「有神論」ではなく、地上で現に生きる人々が光を得てそれぞれの生の拡充を遂げる「汎神論」と規定した。この構図は、西光が投獄された後に展開する「高次のタカマノハラ」の理論でも同じであり、西光は古代神話の世界における原始共産制の平等社会を模範とし、日本のブルジョア主義を批判したのである。一方、植民地であった中国に対しては、西光は日本の神話を強要することなく、中国の伝統を尊重し、その伝統の光に浴した若者が立ち上がることに期待を寄せた。西光は、運動のために待望されるメシアを、親鸞の同朋主義の立場から解釈し、運動に参加する一人一人がメシアとなることによって連帯し合うという構想を抱いていた。こうした西光の思想は、神なきメシアニズム、汎神論的メシアニズムと呼ぶことができる。

キーワード：西光万吉、部落、天皇制、植民地

### 1. 「水平社宣言」の思想的背景

1871年の明治政府による解放令以来、被差別部落に対する問題意識を抱く思想家も現れ<sup>2</sup>、20世紀に入ると、社会主義思想が広まり「部落問題」への関心も広まった。こうした流れに呼応するように、部落民による主体的な解放運動も生まれてくる。西光万吉（1895-1970）、本名清原一隆は、

このような時代を背景とし、奈良県の被差別部落に生まれ育った。西光は1922年に同志とともに全国水平社を立ち上げ、第一回大会を挙行政した。この大会の中で西光が読み上げたのが有名な「水平社宣言」（全国水平社創立宣言）である。「水平社宣言」は西光一人の手になるものではないとの指摘もあるが<sup>3</sup>、この「宣言」が西光の当時の思想

1 明治大学文学部心理社会学科 哲学専攻専任教授

2 中江兆民は、1882年に2回にわたって「新民世界」と題した文章を『東雲新聞』に掲載し、「部落民」に対する差別意識を問題にしている（『中江兆民全集』第十一巻、岩波書店、1984、pp. 64-66、74-77）。

—それが西光独自の思想かどうかは別として—  
一を表していることに異論を唱える者はいないだろう。

「宣言」の冒頭の一句は、「全国に散在する吾が特殊部落民よ団結せよ」であるが<sup>4</sup>、明らかに「共産党宣言」のスローガンを模したものである。「宣言」中の「吾々の祖先は……陋劣なる階級政策の犠牲者」であったという言い回しも、社会主義への共感の表れである。ただし「宣言」に見られる思想的背景は、社会主義との親近性だけではない。「階級政策の犠牲者」という語句に続けて、「(吾々の祖先は)男らしき産業的殉教者であった」という表現が出てくる<sup>5</sup>。この「殉教」という言葉に示されるように、「宣言」には宗教的な色彩も色濃く認められる。特徴的な一文を引用しよう。

ケモノの皮を剥ぐ報酬として、生々しき人間の皮を剥ぎ取られ、ケモノの心臓を裂く代価として、暖い人間の心臓を引裂かれ、そこへ下らない嘲笑の唾まで吐きかけられた。呪はれの夜の悪夢のうちにも、なほ誇り得る人間の血は涸れずにあった。そうだ、そして吾々は、この血を享けて人間が神にかかわらうとする時代にあつたのだ。犠牲者がその烙印を投げ返す時が来たのだ。殉教者が、その荆冠を祝福される時が来たのだ。

「宣言」では、「荆冠」という語を使うことで「犠牲者」たる部落民を、苦難を引き受けるイエスになぞらえ<sup>6</sup>、部落民が「神にかわ」って新しい時代の主人公になると謳う。「宣言」には確かに宗教的な語彙が散りばめられており、イエスのような人物——それは一人である必要はない——に解放の希望を託しているが、神に助けを求めているわけではない。解放はあくまで人間である部落民自身によって勝ち取られねばならない。「宣言」と同時に発表された「綱領」にも、「吾等は人間性の原理に覚醒し人類最高の完成に向つて突進す」とある。

解放運動の主体の問題を掘り下げると、当時、非部落民の同情や理解を得ることで、部落民の生活水準を向上させ、平等を実現しようと試みる活動があった<sup>7</sup>。西光万吉らはこうした「融和運動」に明確に反対し、この運動は部落民の自主性をむしろむしむものだと批判した。宣言は、「過去半世紀間に種々なる方法と、多くの人々によってなされた吾等の為めの運動が、何らの有難い効果を齎らさなかった」、「これ等の人間(部落民：引用者)を勳(いたわ)るかの如き運動は、かえって多くの兄弟を墮落させた」と総括している。そこで「宣言」は、部落民自らが「エタである事を誇り」、平等を追い求め、「人間を尊敬する」ことによっ

3 例えば、朝治武「歴史的記憶としての“水平社宣言”」(『現代思想』1999年2月号“特集=部落民とは誰か”，pp. 153-166)は、西光万吉が起草し、平野小剣(1891-1940)が添削を加えたとしている。朝治武「水平社宣言の歴史的意義」(朝治武・守安敏司編『水平社宣言の熱と光』、解放出版社、2012、p. 84)には、1999年の論文に対する賛否の例が一点ずつ示されている。

4 「水平社宣言」は、『西光万吉著作集』第一巻(濤書房、1971)から引用する。

5 「男らしき」という表現は、今日の視点から見ればジェンダー意識の欠如が指摘される箇所である。前掲、朝治武「水平社宣言の歴史的意義」、pp. 102-103を参照。

6 全国水平社の社旗はキリストがかぶらされた荆冠をモチーフとしているが、この図案は西光のデザインによる。西光は青年時代に絵画を学び、画家になりたいと考えていた。

7 板垣退助を会長として1914年に創設された帝国公道会はその代表である。帝国公道会の性格については、黒川みどり『被差別部落認識の歴史——異化と同化の間』、岩波現代文庫、2021、p. 114以下を参照。

て解放につなげることを目標とする。「綱領」の第一条にも、「特殊部落民は部落民自身の行動によつて絶対の解放を期す」とある。

では、「人間性の原理」に基づく「部落民自身の行動」による運動を主張する宣言に、なぜ宗教的な修辞が混じるのか。「殉教者が、その荊冠を祝福される」とあるが、殉教者に祝福を与える主体はいったい誰なのか。父なる神なのか、それとも「神にかわ」った部落民自身なのか。「宣言」の最後は、「人の世の冷たさが、何んなに冷たいか、人間を動る事が何んであるかをよく知っている吾々は、心から人生の熱と光を願求礼讃するものである。水平社は、かくして生れた。人の世に熱あれ、人間に光あれ」と結ばれている。人口に膾炙した「人の世に熱あれ、人間に光あれ」と、その直前の「人生の熱と光を願求礼讃する」とは同じことを意味しているように思えるが、注意すべきは「願求」も「礼讃」も、仏教で頻繁に使われる用語であり、「願求礼讃」する対象としての仏の存在を想起させる。彼はキリスト教の影響を受けると同時に<sup>8</sup>、親鸞の思想を継承している側面もある。西光が著した「よき日のために（水平社創立趣意書）」（1922年）には、「われわれ親鸞の同行」という表現とともに、「ナザレのイエスの心もちに生きる」という言い方も登場する（1：18-19）<sup>9</sup>。また、キリスト教や仏教——後述する

ように、西光によれば、神道もそこに加えることができる——は人類の平等を保証する宗教であつて、部落民の解放を擁護する理論的支柱となりうる可能性をもっている。解放運動の主体と神仏の力との関係は、単なる修辞上の問題ではなく、理論的な検討に値する問題だと言えよう。

## 2. 西光万吉の「汎神論」

西光万吉の宗教観を、浄土真宗との関わりから検討してゆく。西光が浄土真宗の寺（奈良県（現）御所市の西光寺）の生まれであるように、浄土真宗と部落民との関係は密接である。歴史家の喜田貞吉（1871-1939）は、1911年に次のように記している。

けだし彼ら（部落民：引用者）はもと屠殺を業とし、皮革を扱い、肉食になれていたがために、穢れたるものとして、仏者から嫌われ、ことに仏臭を帯びた神道者流から甚だしく忌まれた結果、自然と仏縁にも遠かったのを、幸いに真宗の布教によって救われて、始めて極楽往生の有難いことを覚ったのであった。ことに彼らは社会の圧迫がますます彼らに加わり、社会の侮蔑がますます彼らに注がれるに及んで、痛切に現世の穢土なることを観じ、一心に浄土を冀うのほかまた何らの光明をも認め

8 当時、日本の多くの社会主義者がキリスト教の影響を受けていた。その代表的な人物が賀川豊彦（1888-1960）であるが、西光は賀川に教えを乞いに行ったことがある。

9 以下、『西光万吉著作集』（濤書房、1971-1974年）からの引用の際は、巻数とページ数のみを記す。近藤俊太郎は、「西光万吉ら全国水平社の創立メンバーに大きな影響を与えた」佐野学（1892-1953）が、「親鸞思想をマルクス主義やキリスト教に通底するものとして位置づけて」いたことを指摘している（近藤俊太郎「親鸞とマルクス主義——佐野学の思想経験を中心に——」、近藤俊太郎・名和達宣編『近代仏教思想と日本主義』、法蔵館、2020年、p. 511）。また、藤野豊は全国水平社による東西両本願寺への募財拒絶闘争が起こった背景として、親鸞に対する社会的関心が高まっていたことを指摘する。藤野はさらに、1916年に発表された倉田百三「出家とその弟子」が呼び水となって「親鸞ブーム」が沸き起こったこと、倉田の描く親鸞像が「キリストと共通するイメージをほどこされたもの」であること、それ以後、親鸞は「平等論者」として見直されることになったことなどを指摘している（藤野豊『水平運動の社会思想史的研究』、雄山閣出版、1989年、pp. 77-78）。

難き状態となったが為に、これをその光明界に導き給う仏に帰依するの殊に篤きに至ったのは、まことに無理からぬ次第である。<sup>10</sup>

1921年の調査によれば、日本の部落家庭の82%が浄土真宗の信徒であった<sup>11</sup>。当時の水平社運動のリーダーのうち、親鸞の思想に傾倒していたのは西光一人ではない<sup>12</sup>。

一方で、真宗の僧侶の中には、部落解放運動に対して冷淡な態度を取る者もいた。真宗本山である西本願寺の大谷尊由（1886-1939）は、『親鸞聖人の正しい見方』を発表し、「聖人の同朋主義の価値は、之を法悦生活の上に体験せねばならない、社会改造の基調などに引き付けるには、余りに尊と過ぎるのであります」と主張していた<sup>13</sup>。親鸞が語っているのは世俗を超えた理想であって、現実社会に適用できないというのである。大谷は、したがって、「自然に成り立てる差別は差別として、其の上に人類平等の理想を実現しよう」と説く<sup>14</sup>。それに対して西光は1922年に「業報に喘ぐもの——大谷尊由氏の所論について。特に水平運動への誤解者へ——」と題した一文を発表し（1：28-48）、大谷尊由の見解に反対した。西光は、たとえ差別が自然に成立したものだとしても、今後の人工の改革を妨げるものではないとして、われら部落民は差別を黙認せず、ただちに解放運動に従事すべきだと主張する。みずからの立場を説明するために、西光は主体の問題に説き及んでいるが、そこでマルクスやブレハーフに言及しつつ、

極端な他力主義に反対すると同時に極端な自力主義にも反対し、社会的存在の重要性を強調している。その際、西光は同様の方向性を親鸞の思想にも見出し、親鸞を、大谷尊由から自分たちの手に奪い返そうとする。西光によれば、社会主義者が人間の意識は社会によって規定されていると説くのは、親鸞が人間は業によって規定されていると説いているのと同じである。西光はこの被規定性を「汎神論」という言葉で表現している。社会にせよ、業にせよ、個人を超えて個人を規定する存在が「汎神論」の「神」なのである。これとは異なり、大谷尊由の説くような現実世界を超えた理論は、もはや「汎神論」ではなく、「有神論」だとされる。「汎神論」と「有神論」の区別について、西光は詳細には語っていないが、文脈から考えるなら、「有神論」が人々に絶対の帰依を要求し、現実社会における人間の主体的な活動に対して制約を加えるものであるのに対し、「汎神論」は、人間の現実社会における活動の条件を規定するものの、人間が団結して活動することを支持し、鼓舞する理論だと言える。西光は、汎神論的世界を、人間がそれぞれ生を拡充する世界とみなし、生の拡充が社会の改造に帰結すると考えた。

同朋主義は汎神論的であるにもかかわらず、このあまりにたっとすぎる同朋主義<sup>15</sup>は有神論的である。汎神論の世界には、倫理はない。そして必然が支配する。そこで私はべつに社会を改造しようとするのではないが、自己の

10 喜田貞吉「特殊部落と寺院」、『被差別部落とは何か』、河出書房新社、2019年、p. 213。

11 和田幸司、『浄土真宗と部落寺院の展開』、法藏館、2007年、p. 7。

12 同和教育振興会編、遠藤一他著「初期水平運動と親鸞思想」、『講座 同朋運動——西本願寺教団と部落差別問題——』第三巻、明石書店、2016年、pp. 225-246。

13 大谷尊由『親鸞聖人の正しい見方』、興教書院、1922、p. 107。

14 同上、p. 105。

15 「たっとすぎる同朋主義」とは、大谷尊由の主張を指す。

生の拡充は必然にそれをする。客観的にそれが善であるか悪であるかは知らぬが、生の拡充は客観的論理を超えた善である。それは「善人をおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」の願力不思議である。因果的必然は私をして水平運動に参加せしめた。(1:37)

西光は同篇の中で、「自己の小さな力が、大きな願力に乗せられて法悦境を行く」(1:38)、「念仏は意識される愛ではない。もっと深い生命の筐底から昇騰する、見えざる精気である。ワンネスあるいはソリダリティの無意識的承認である」(1:39-40)といった言い方もしており、仏教用語を積極的に使用して生の力に対する信頼を吐露し、その生の力に突き動かされて自分が他人と一つになって行動するのだと述べている。

西光の「業報に喘ぐもの」という一文からは、「水平社宣言」の中で宗教的な語彙がちりばめられている背景をうかがうことができる。西光の解釈によれば、水平運動は個人の意志を超えた必然的な社会運動であり、運動に参加する主体の生は、超越的な存在によって突き動かされている。その超越者は神でも仏でもよいし、社会、因果、生そのものと言い換えてもよい。「宣言」の「心から人生の熱と光を願求礼讃する」という表現も、こうした文脈から理解される必要がある。

西光は「業報に喘ぐもの」の中で、親鸞の思想を参照するだけでなく、メシアに対する期待も表明している<sup>16</sup>。

……われらの運動は、必ず新しいメッシヤが

賤民として長い間試練せられてきたわれら選民のなかから生まれるであろうとの信仰によって支配されている。水平運動は新しいメッシヤの思想から生まれたものである。(1:41)

ここで言うメシアは、神仏とは異なり、運動主体の背後にあってその運動を加護する存在ではなく、親鸞と同じく、運動主体の同朋となって運動を導く者である。メシアの出現を待望することは、運動の主体性を制約するものではなく、運動の主体が超越者によって選ばれた人民であることを、したがってその運動が必然的なものであることを保証するものである。

### 3. 西光万吉と天皇制

ここまで、水平社運動開始時の西光万吉の思想を検討してきたが、西光の生涯全体を視野に入れた場合、避けて通れないのが西光の「転向」に関する問題である。1928年3月15日、日本政府は「治安維持法」に基づき、数千人にのぼる共産黨員らを拘束した。この時に西光万吉も共産黨員だとみなされて逮捕、拘留され、1933年に釈放された。刑期満了よりも数ヶ月早い出所であった。西光は後に回顧して、早めに釈放されたのは、収監中に「マツリゴトに関する粗雑な考察」と題する文章を執筆したからだろうと述べている（「農民運動の思い出」1:82-83）。この文章で、西光は、まず、日本において単一民族からなる組織がつけられたと説き起こす。そして、古代日本の母系制の時代において、核となる女性が祭司となり、この

16 西光は「有難い往生」と題する一文の中でも、イエスと親鸞の復活を併記し、廃刊する雑誌『警鐘』が水平運動の中で復活することに期待を寄せている（『警鐘』廃刊号、1922年8月。『復刻版警鐘』、不二出版、1988年、p.524）。

祭司を中心として平等な社会が成立していた、と主張する。その上で、天照大神を始祖とする天皇制を称揚している。西光はこうした自身の理想を現実化する過程を「高次の高天原への展開」と表現する。たとえば、「天皇制の帰結としての国家主義、国体完成としての同胞社会主義、マツリゴトの確立による高次タカマノハラへの展開こそ、昭和維新のスローガンではなからうか」、あるいは、「マツリゴトとは原始共産社会の最後の段階たる農業共産社会において、もっとも発達した社会的生産組織の中核作用であり、タカマノハラとは、天照大神をめぐる同胞的共同体の国土である」などと記している（『明治維新のスローガンと昭和維新のスローガン』2：27, 31）。

西光のこのような天皇制を賛美する態度は「転向」であると批判されることもあった<sup>17</sup>。しかし、拘留された後に共産党から離れたのは事実としても、彼はその後も、共産主義に対しては肯定的な態度を取り続け、変わらずブルジョア主義を批判している。神話化された古代日本という理想社会は、ブルジョア階級が掌握している日本主義を批判するための根拠として利用されているのである。西光の理解によれば、天皇制と共産主義は決して矛盾するものではなく、むしろ一つに融合しうるものだったのであり、日本の神話に描かれた、

祭司を中心とする平等社会が実現していた社会がその模範的な例を示しているのであった。

西光は拘留される以前から、天皇制に対しては支持を表明している。たとえば、1921年に「紫朗」の筆名<sup>18</sup>で発表した文章には次のように記している。「私は先帝陛下の有難い御所存に感泣するものである。先帝は吾々の汚名を御廃止下さった。そこで吾々は解放運動に力強くなったのは真実である<sup>19</sup>。」なお、解放令を明治天皇の恩恵ととらえ、それに報いようとする動きは、西光のみならず、部落解放運動側に広範に見られる。部落民の松井庄五郎を会長に1912年に発足した大和同志会の機関紙『明治之光』は、そのような意図で命名されたものである<sup>20</sup>。藤野豊は豊富な事例を挙げつつ、「全水青年同盟を除いた初期水平運動は、明治維新を経て成立した近代天皇制国家の本来の姿にこそ「一君万民」の平等な社会を錯覚して見出ししていた」と結論づけている<sup>21</sup>。

こうした西光の天皇制理解を、前節で見た彼の「汎神論」と結びつけて考えたい。上述したとおり、西光は拘留前に、「有神論」という言葉で大谷尊由を批判し、彼岸における救済を求めるのではなく、現実での社会変革を希求すべきことを説いていた。釈放されてからも、彼はその区別にこだわり、1935年に発表された一文で、古代のマツリゴ

17 西光の「転向」をめぐる研究史については、前掲、藤野豊『水平運動の社会思想史的研究』第七章「水平運動と国家社会主義の思想」の「はじめに」(pp. 211-219)にまとめられている。藤野は表面的な「転向」を貫く西光の思想の一貫性を強調しており、本稿も同じ立場に立つ。藤野も参照している藤本信隆「西光万吉の転向について—宗教的側面を中心に—」(二葉憲香編『続国家と仏教 近世・近代編』, 永田文昌堂, 1981)に次のようにあるのを参照。「彼の生涯を貫徹する思考パターンは、唯心論と唯物論の止揚統一によって、独自の思想を創造するというものであり、その内容も、人間の尊厳にもとづく徹底した人間愛を根拠として、差別のない精神的平等と搾取のない経済的平等のあるユートピアの実現を志向するものであった。彼の複雑な思想遍歴の軌跡も、抽象的にみれば、実は非常に論理一貫したものであり、一本の太い線を描いているのである」(p. 275)。

18 「紫朗」のペンネームは、西光のものではなく、駒井喜作(1897-1945)のものだとする説もある。

19 紫朗「解放と改善」、『警鐘』第二巻第十一号、不二出版、p. 377。

20 前掲、黒川みどり『被差別部落認識の歴史』, p. 104を参照。

21 前掲、藤野『水平運動の社会思想史的研究』, p. 49。

トに関して以下のように説明している。「当時のマツリゴトは、……どこまでも天国の光栄、あるいは彼岸の浄土を求めるものではなくして、端的に現実的幸福として地上の豊饒と平和を希望したもの」であった（「高次のタカマノハラを展開する皇道経済の基礎問題」, 2 : 9）<sup>22</sup>。彼は1936年にも、天皇に代表される「神ながらの道」について、「原始的タカマノハラ以来悠久なる年代にわたるこの道は、天国の栄光、彼岸の寂光にみだされぬ地上的な人間の社会的本能の上につづいてきたったもっとも自然順調なる理想道だ」と記している（「奉還思想を基礎とする日本の皇産主義」, 2 : 37-38）。したがって西光の掲げる「高次タカマノハラ」は、「有神論」と対立し地上の変革を目指す人間を支えた「汎神論」の議論に接続することができる。

1942年に西光が発表した「ひふみよ談義」は、よりいっそう明確に彼の汎神論的思考をうかがわせる資料である。同文中において西光は、科学的世界観は一面的にすぎないとし、代わりに「総合統一された生命」の次元を提示し、「これは、もとよりたんなる万有靈魂観や庶物崇拜ではないが、その本質において、自然にあい通ずる惟神の生命的世界観である」と敷衍している（2 : 149）。続いて西光は、この「惟神の生命的世界観」を端的に説明する言葉として、伊勢詣りをした際に猿田彦神社の神主から聞いた「ヒフミヨ」の話に掲げる。すなわち、「ヒフミヨ」は「たんなる数の呼び方ではなく、……ふるき大和の石上神社に伝わる神前に坐して唱える言霊」であり、「ヒは霊であり日であり光である。フは吹くであり気

体である。ミは水であり液体である。ヨは筋<sup>ツ</sup>よであり固体である」。以下、六から十に至り、十を指す「ト」は人であるとして、霊、日、光から人に至る万物の生成が数字の呼び名にかこつけて説明される（2 : 149-150）<sup>23</sup>。ここに西光は「草木国土悉皆成神の哲理」（2 : 151）を読み取っており、水平運動開始時の「汎神論」の主張とはるかに呼応している。

拘留後の変化としては、西光は親鸞やイエスにほとんど言及することがなくなり、代わりに高天原や、マツリゴトなどの用語を頻繁に使うようになる。運動の主体にエネルギーと光を与える源泉の名前は変わるが、超越的存在が運動の主体を支え、「汎神論」を介して運動主体に「生の拡充」を遂げしめるという構造は一貫している。「転向」があったとしても、彼の根本的な思想の構造は変わっていないのである。西光は戦時中に、日本の国体に関する文章を次々に発表しているが、天皇個人に対する崇拜を唱えることはない。「高次タカマノハラ」の世界は、現人神が君臨する「有神論」の世界ではなく、「汎神論」の世界なのである。

#### 4. 植民地に対する眼差し

次に、西光のこうした「汎神論」的立場が、他者に向けてどのような働きを示すのかを見てゆこう。ここで言う他者とは、植民地に生きる現地の人々のことである。

太平洋戦争が始まると、1942年に全国水平社は解散させられ、融和主義が再び幅を利かせるようになる。1941年に設立された同和奉公会は部落民を糾合し、彼らに日本国民として戦争を支持する

22 西光は、別の文章で「原始的高天原から高次的高天原へ」を「天上の高天原から地上の高天原へ」と言い換えている（「事変下に金鶏を語る」, 2 : 91, 「偶感雑記」, 3 : 21）。

23 同様のことが、「祈りの心と科学的態度」でも述べられている（2 : 187）。

よう呼びかけた<sup>24</sup>。西光万吉も日本の国家主義に賛同し、当時の日本政府の政策に対しても時に積極的に支持を表明する。しかしながら、西光は日本の帝国主義とは一線を画そうとしていた。植民地支配に関して、彼は日本政府が提起した「王道楽土」の建設に心から賛同するがゆえに、「王道楽土」の理想と現実との間に隔たりがあれば、理想に基づいて現実を痛烈に批判した。1939年、彼は満州に視察旅行に出かけ、その報告として「わんとうろうとう」雑記を執筆した。「わんとうろうとう」は、「王道楽土」の中国語の発音をひらがなで記したもので、この文章は、中国の人民の立場を尊重する西光の考え方が表明されている。西光は、満州で出会った「協和服の老子<sup>25</sup>」の言葉として次のように記している。満州国の運営や協和会の活動においては、「古代よりのアジア的なものが考慮せられ、近代ヨーロッパ的なものを消化し超越した、新しいアジアの型が創造せらるべき」である、と（2：263）。

では、西光はどのような思いで「アジア的」という言葉を使っているのだろうか。彼は同文の中で、新京（現在の長春）に建てられた建築物の中でも高等法院の建物を高く評価し、「資本主義的侵略によって東洋へ流れこんできた建築様相を、新しいアジア的風格によって克服せんとする文化的意欲の逞しさ」を示すものであり、「新興アジアの生息が感ぜられる」と称える。そこには、中国の人が暮らす「ミミズの土糞のような農村の土の家」との連続性を見て取ることができるとも述べている（2：254-255）。西光はまた自分の眼で

見た中国の農民の姿を次のように描いている。土で建てられた家から出てくる彼らは、まるで「あやしき土の化生、土の精たち」であるかのようだ、と（2：257）。西光はここから、女媧が泥から繩をひいて人間をつくったという神話を想起している。西光は決して中国の農民を蔑視しているわけではなく、むしろそこに「新興アジアの生息」「逞しさ」を感じとり、「王道楽土」建設の理想は、こうした農民たちのためではなくてはならないと考えているのである。

西光は、「わんとうろうとう」雑記の中では、高天原やマツリゴトといった神道に関わる用語を用いず、『老子』や『論語』を引用して、満州における政治のあり方を議論している。中国の人民の姿からは、日本の記紀神話ではなく、やはり女媧の神話の方が想起されるのである。「王道楽土」という日本語ではなく、「わんとうろうとう」という現地の発音をタイトルとしていることも考え合わせると、西光は中国の人民に日本の政治思想を押し付けるのではなく、中国の伝統思想に対して尊敬の念を抱き、その上でアジアの連帯を模索していたのだと言える。「水平社宣言」の言葉を使って言えば、中国人を「勳（いたわ）る」のではなく、「尊敬する」というのが、中国人民に対する西光の基本的な態度であった。

西光はまた、1942年に「孔子の『夢』を思う」と題した一文を草し、中国の伝統思想を通じて自身の希望を表現している。西光に抛れば、孫文は三民主義の一つとして民族主義を提起しているが、孫文は「民族主義にたつかざり、知ると識ら

24 廣岡浄進「アジア太平洋戦争下の被差別部落における皇民化運動——同和奉公会についての点描」、黒川みどり編著『“眼差される者”の近代——部落民・都市下層・ハンセン病・エスニシティ』、解放出版社、2007年、pp. 49-72。

25 「協和服」は、満州国に設立された協和会が規定した服装である。「協和服の老子」は協和会のメンバーの一人だと推察される。

ざるにかかわらず、孔子の夢を追求せざるをえない。なぜならば、いうまでもなく民族共同体は血縁的なものであり、ひっきょう「孝」がその道德倫理の根本であるからである」（2：278）。西光はまた、孫文の民生主義を共産主義ではなく「孝産主義」だと解釈している。「孝産」が意味するのは、祖先祭祀を通じて結合している宗族の共同財産であって、これは中国式の「皇産」とみなすことができる。「三民主義が孔子の夢によって、さらに民族的に醇化せらるべきだ」というのが西光の結論である（2：287）。中国の民族主義を是認する西光は、中国人に対しては、財産を日本の天皇に奉ること（「皇産」）を求めず、中国の伝統的な孝の働きによってブルジョア主義を克服することを期待したのだ。

西光は、日支事変（日中戦争）の意義について、「八紘一字の大思想は、マツリゴトをつたえた人間の祖国に、しぜんそなわるものではあるが、世界中の国民と民族とあらゆる人間が、これに参加したからとて、けっして自然の道理に反することではあるまい」と記している（「事変下に金鶏を語る」、2：92）。しかし西光がこのように記するのは、八紘一字の思想をまつろわざる中国の民に押し付けるためではなく、むしろ「崇高なるマツリゴトの理想」が、日本の「卑俗なる政権に汚された俗悪なる政治意識によって」曇らされていることを批判するためであった<sup>26</sup>（2：93）。また「炎天に夢みる者」と題された文章で、西光はこう記している。「日本軍が爆撃しているのは、けっして支那の文化、アジアの文化ではない。それは、

支那をアジアを奴隷国たらしめんとする欧州の植民地文化である」（2：86）。これが、中国の側からは詭弁に思えるとしても、西光自身はこの建前にすぎり、アジアの解放を心から願っていた。西光は、同文章中で、「まともに太陽をうけて、燃え輝く黄金向日葵が大好きだ」と記し、向日葵を「太陽を理想として戦い倒れた若者の精だと思う」と述べている（2：85）。西光の文章を引用しておく。

かれ（戦いに倒れた若者：引用者）は炎天に夢をみる。かれは灼熱の血に狂う。かれの生命の逞しさよ。大地に根を張り太陽に花を開き、力にみちてすつくと立つ。かれは新興アジアの若者の象徴である。（2：85）

わたくしらは、業火と悪夢と熱血の燃えたがり渦巻きかえる抗日の坩堝のなかに、芽生えるであろう若い支那に、やがて大きく開く花は……、西北ルート of 赤色でもなく、西南ルートの白色でもない。それはまさしく太陽に向う黄金向日葵のように、黄色に輝くアジアの色だと思っている。（2：85-86）

「抗日の坩堝のなかに」立ち上がるアジアの若者への限らない共感が、部落解放のために戦う同志に対するかのような口吻でつづられている。日本には「原始的タカマノハラ以来」の光があるが、中国には別の光源があり、それがアジアの若者を立ち上がらせることを西光は期待していたのであ

26 こうした西光の「八紘一字」の用法は、皇道の覇道化、帝国主義化を批判する西田幾多郎の次のような発言と響き合うものである。「我々は我々の歴史的発展の底に、矛盾的自己同一的世界そのものの自己形成の原理を見出すことによって、世界に貢献せなければならない。それが皇道の發揮と云うことであり、八紘一字の真の意義でなければならない」（『日本文化の問題』、『西田幾多郎全集』第九巻、岩波書店、2004年、pp. 52-53）。

る。

西光は第二次大戦後、「私にとっては中国と戦って勝っていた時よりも、太平洋戦争になって敗けていた時の方が、はるかに気持ちが軽かった」と回顧している<sup>27</sup>。抗日のために戦う若者を含む中国の人民に心を寄せ、新しいアジアの型の創造を夢見ていた西光にとって、日本の植民地政策は悲憤を抱かせるものだったのである。

### 5. 小結：西光万吉のメシア主義

西光万吉は、超越的な光に依拠しながら、最初は部落解放運動のために、ついで高次の高天原運動のために、自身の力を尽くそうとした。これらの運動は天上に王土を実現するのではなく、地上に理想の楽園を建設するものとして企図されていた。彼は、この理想を阻むものと見れば、現実の政治的権力に対する批判も積極的に行った。外地における植民地政策を批判するとともに、日本国内の大政翼賛会をも批判した<sup>28</sup>。西光は一貫して、運動に参加する個人は、権力者に対して無批判に従順であってはならず、光に照らされ、能動的に行動する主体でなくてはならない、と考えている。光は少数の指導者を照らすばかりではない。「水平社宣言」に「人間に光あれ」と謳うように、光

はあらゆる人間に届くものでなくてはならない。戦前、西光自身は、天皇制を中心として日本人が同じ光に浴しているからこそ、平等な共産社会を実現できると考えていた。これは、西光によれば、唯一の生命が流出することによる必然的な展開であった<sup>29</sup>。第二次世界大戦の敗戦により、天皇制のもとでの理想の実現は頓挫した。彼は日本の敗戦を「悪業」によるものと総括した上で、自分の責任にも言及し、「自分がその悪業を浄化するための真の智慧と気力を欠いて、その悪業に引きづられていたからである」と記している（『略歴と感想』、1：96）。自殺も企てたが、再三の自殺はすべて未遂に終わり、西光は気力を取り戻し、新しい日本国憲法の不戦の誓いをよすがとして、平和運動のために尽力し、1970年に病死する。

着目すべきは、西光の思想の一貫性である。確かに西光は戦前の自己の行為に対して反省を行っているが、それは自分の努力が足りなかったという反省であり、努力の方向性が誤っていたという反省ではない。自分がメシアになりきれなかった、という反省であって、自分の思想が誤っていたとは考えていないのである<sup>30</sup>。

西光の根本思想は、運動の背景に強力な光源を想定するが、光源を特定の神や人物に限定せず、

27 西光万吉、「略歴と感想」（1：94）。西光の日中戦争と太平洋戦争に対する見方は、竹内好と類似する点がある。

28 西光は1942年の論説で、次のようにも記している。「大政翼賛会ならばわかりもよいが、大政服従会ではいささかおかしい。秦の始皇帝にでもつかえるようで。けれども、おたがいは、皇民であって黔首ではないはずである」（『農村問題雑感』、2：328）。

29 第二次大戦後に西光が記した以下の文章を参照。「私はかつて共産党員であった。それが今日のようにになったのは、唯物と唯心を超えたいのちの世界を思い、高次的な高天原の展開を望む者は、高天原の世界観に生きることは当然であり、日本の天皇制が惟神に原始的高天原から高次の高天原に貫き通ずる道であることを信じたからである。（『偶感雑記』3：22）。

30 西光は戦後、次のように述べている。「私は、いわゆる軍国主義者ではない。いわゆる帝国主義者でもない。かつては、反軍国、反帝国主義運動をしたのだから——と思っていた。けれども、それは間違っていた。私は自分ではどう思っていたにもせよ、事實は彼らの道づれになっていた」（『偶感雑記』、3：10）。ただし、彼は「高天原」の理想を戦後も手放してはおらず、「私にとって、高天原は単なる神話であるよりも歴史である」（3：11）と述べ、歴史的事実として首肯している。師岡佑行も西光の戦前戦後の思想の一貫性を指摘している。師岡佑行『西光万吉』、清水書院、新装版、2016年、p. 173を参照。

光に照らされていることを自覚した人民が平等社会の実現のために力を尽くすことに期待するといふものであった。この点で彼は現人神を担ぐファシズムとは一線を画し、天皇制に先立つ高天原の原始共産社会を理想としたのである。それは神なきメシア主義、あるいは汎神論的メシア主義とも言い換えることができる。この場合のメシアは、

運動に参画する人民の誰もがなりうる存在である。西光は「汎神論」というプリズムを用いて、高みから差し込む光を水平に照射し、現実社会に生きる人々の連帯の可能性を担保した。さらに、その光源は世界に一つではなく、別々の光に照らされた日本と中国とが連帯し合う可能性も彼は模索していたのである。

## From Where Comes the Light? : Saikō Mankichi's Political Thought

Yoshinobu SHINO

### ABSTRACT

Saikō Mankichi, one of the leaders of the Suiheisha movement, developed his theory for the movement incorporating Shinran and Christian ideas in addition to Marxism. He defined his theory as “pantheism,” in which people who live on earth gain transcendent light and expand their original lives, rather than “theism,” in which salvation is obtained only in heaven. Even after his imprisonment, when he developed the myth of the “Higher Takamanohara,” he remained consistent in his position. He criticized Japanese bourgeois spirit by postulating the primitive communist society in the ancient Japanese myth. He also criticized Japan's colonialism on China, and he showed his solidarity by respecting Chinese traditions. He even hoped that young Chinese people would rise up bathed in the light of those traditions. Saikō interpreted the Messiah who would lead the movement from the standpoint of Shinran's idea of fellowship, and he envisioned that each person participating in the movement would be in solidarity with each other by becoming the Messiah. This idea of Saikō could be called atheistic messianism or pantheistic messianism.

Keyword : Saikō Mankichi, outcast, The emperor system, colonialism